熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ
Quarterly magazine FOYER
2026 Spring

028

つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ

FOYER

Special feature
避難訓練コンサート
～参加して、見て、聴いて、「もしも」に備えよう～

ホワイエ薪能

天井改修工事に伴う閉館についてのお知らせ

熊本県立劇場の耐震強化のため、熊本県が実施する特定天井改修工事に伴い、下記のとおり施設を閉館する予定です。
特定天井とは、日常的に人が利用する場所にある、高さ 6m超、面積 200㎡超、質量 2kg超の吊天井のことです。
工事期間中の利用受付や工事内容に関する情報・変更等は、随時ホームページにてご案内いたします。
ご利用の皆様にはたいへんご不便をおかけしますが、県立劇場をより安全に、かつ快適に提供するための工事ですので、ご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

- ■ 閉　館　期　間　**2026年 10月 1日（木）から 2028年 2月末日まで**
  ※工事の進捗状況によっては、閉館期間を延長する場合があります。
- ■ 停　止　施　設　**全施設（ただし、駐車場を除く）**
- ■ 予約受付停止期間　**2026年 10月以降**
- ■ 主 な 工 事 内 容　**コンサートホール及びコンサートホールホワイエ、演劇ホール及び演劇ホールホワイエ、西側エントランスホール、モールの特定天井の改修　等**

※2026年 10月より事務所及びチケットカウンターを劇場近隣に移転する予定です。
詳細は 4月以降に劇場ウェブサイト等でお知らせいたします。

特定天井改修工事に関するホームページ URL
https://www.kengeki.or.jp/ceiling-repair-work

熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ　2026 Spring　発行日：2026.3.20　※掲載内容は2.28現在のものです。

Special feature

熊本県立劇場 × 熊本市消防音楽隊

避難訓練コンサート

～参加して、見て、聴いて、「もしも」に備えよう～

2026年1月31日（土）
熊本県立劇場 コンサートホール

劇場で起きうる「もしも」を体験することで いざという時の「備え」を考える。

いつ、何時、どこで、どんな災害が起きるかわからない。
「もしも」地震が起きたら、「もしも」火事に直面したら。
その「もしも」は、なにげない日常のなかでも、
劇場のなかで音楽を楽しむ非日常の時間でも起きうることです。
今回は劇場での「もしも」に備えるために開催された
「避難訓練コンサート」についてレポートします。

コンサート開催中、防災センターでは、危機管理者の指示で消火活動、避難誘導などの訓練を行った

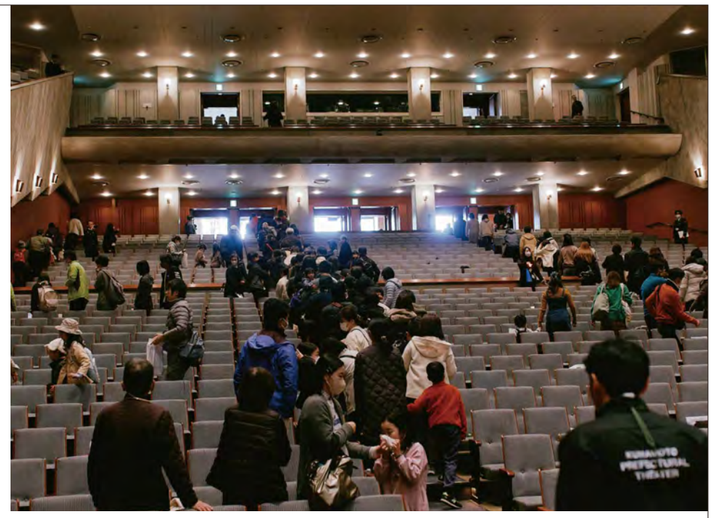
火災発生を想定した12年ぶりの避難訓練コンサート

公演中に発災したことを想定し、演奏者・観客と一緒に避難訓練を行う「避難訓練コンサート」を、２０２６年１月31日、熊本県立劇場のコンサートホールで開催しました。観客も参加して実施する避難訓練は、東日本大震災の翌年からはじまり、今回で４回目。前回開催の２０１４年から実に12年ぶりの開催となりました。

通常のコンサートと同じように演奏を楽しみ、災害発生を想定した避難訓練を同時に行う取り組みは全国的にも珍しく、約５００人の観客が参加しました。集まった観客は、小さなお子様連れの家族が多く見られ、なかには乳幼児を抱いた参加者もいたほどで、その関心の高さがうかがえました。また、県内外の施設７館から12人の視察があり、避難訓練コンサートに観客として参加。発災時の動きや、スタッフの避難誘導手順を見学するとともに、観客と同様に避難訓練を体験しました。

今回の避難訓練コンサートは火災発生を想定し、熊本市中央消防署の全面的な協力を得て、消防音楽隊の演奏を楽しむプログラムで進められました。公演前には、館内外で消防車、救急車の展示、煙体験コーナー、ＶＲ消火体験コーナー、なりきり消防士フォトスポットなどのイベントが開かれ、かなりの賑わいを見せていました。また、コンサートホールの舞台上では、熊本地震後に県

ホワイエから2カ所の避難ルートをたどり
玄関前のプロムナードに向かう



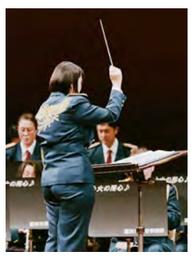
劇場職員の誘導に従って、落ち着いて避難する観客の姿

立劇場が避難所や学校で行ったアートキャラバンくまもとのスライドショーを投影。ホワイエでは、2016年の熊本地震の際の活動を報告するパネル展示もあり、多くの人が足を止め、その当時のことに思いを巡らせる一幕もありました。

公演前には訓練の流れと避難方法について司会者から説明があったものの、どのタイミングで火災発生のアナウンスが入るのか事前には知らされず、消防音楽隊の演奏ははじまりました。最初の演奏曲は、映画「バックドラフト」のメドレー。演奏がはじまった途端、避難訓練とわかっていても観客は演奏に引きこまれていきます。実はその裏側では、火災報知器の警報を聞いた劇場職員たちが、火元確認、消火活動の訓練を行いました。2曲目の「365歩のマーチ」の途中で消火栓を用いた消火活動に失敗した想定で、館内にブザーと避難誘導のアナウンスが流れました。職員の誘導に従って、避難集合場所となる入口前のプロムナードまで落ち着いて移動し、避難は完了しました。避難訓練後は休憩をはさみ、再び消防音楽隊の演奏を楽しみました。演奏されたのは、アンコール曲を含めて8曲。避難訓練に参加した観客は、コンサートホールの音の響きを楽しみ、音楽の楽しさを味わう時間を共有しました。

不特定多数の人が集まる施設である劇場は、消防法に基づき年2回以上の避難訓練が義務づけられています。県立劇場では、大きな災害を想定した訓練を4回、小規模でも4回、年に8回訓練を行っており、継続的に防災の取り組みを実施しています。観客も参加した避難訓練コンサートは、そうした日常的な訓練の積み重ねを実践ベースで職員が再認識するうえで重要視しているものです。避難訓練後には、熊本市中央消防署副署長、岩本和士さんから講評があり、そのなかで「実際は火と煙を目の当たりにしたら慌てるかもしれませんが、誘導に従って今日のように落ち着いて行動してほしい」とのコメントがありました。また、火災発生時の注意点や、建物の誘導灯の確認とマークの意味、階段を使った避難等の解説があり、防災について学ぶ機会にもなりました。音楽を楽しみ、防災意識を高め、そして家族で話し合うきっかけづくりにもなる今回のプログラムによって、もしもについて考えることが、家庭から、そして地域全体に広がっていくことが期待されます。

避難訓練後は熊本市消防音楽隊の演奏が披露された



避難訓練コンサート参加者の声

『子どもと共に参加できてよかったです。防災にも、音楽にも触れられる良い機会でした』

『自宅内での震災対策だけを考えていましたが、出先や建物内での非常時にどう動くか考える良い機会になりました』

『職場や地域以外での避難訓練に初めて参加しました。慣れない場所で関係者やスタッフの落ち着いた誘導があると安心できることを感じました』

『消防士の方々の活動の様子を知ることができました。演奏も素晴らしかったです』

『避難訓練時に劇場の方の「気分の悪い方はいませんか?」の声かけにほっと安心しました。本当の災害時ならパニックになったり、具合が悪くなる人も多くなると思いました』

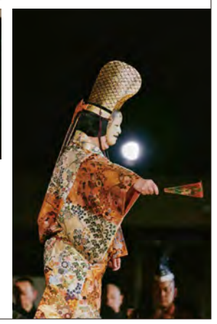
Special feature

ホワイエサロンシリーズ vol.13

ホワイエ薪能

2026 年 2 月 7 日(土)
熊本県立劇場 コンサートホールホワイエ

〈演目〉狂言／樋の酒(ひのさけ)、能／船弁慶(ふなべんけい)
〈出演〉狩野了一(シテ方喜多流)、野村万禄(狂言方和泉流)ほか



夕闇に浮かび上がる篝火が、非日常の空間に誘う「ホワイエ薪能」

凍てつく空気を纏った立春をすぎた2月7日、熊本県立劇場コンサートホールのホワイエにて「ホワイエ薪能」を開催しました。階段上の窓際に能舞台を設え、ガラス窓の外に篝火を焚き、ゆらゆらと燃える炎とホワイエ内で繰り広げられる舞いと演奏が一体となり、なんともいえぬ幽玄な空間が創り出されました。県立劇場だからこそ実現できた特別な公演に、約220人の観客が魅了されました。

日常的な動作や会話で人間のおかしみを描き出す「狂言」と、能面をつけた舞いと音楽を巧みに織り交ぜ、物語を叙情的に描く「能」は、兄弟のように発展してきた日本の伝統芸能です。公演に際して観客にその背景と、今回の見どころをわかりやすく伝える解説が行われました。その間に窓の外に設置された篝篭(かがりかご)に黒子が火をくべ、これから待ち受ける世界への期待感が増していきました。

最初の演目は、狂言「樋の酒」。物語は、主人(あるじ)に留守を仰せつかった太郎冠者が、酒蔵の番をする次郎冠者に酒を求めるやり取りを軸に展開されます。人間の欲望を軽妙なタッチで描く代表的な狂言で、観客の心を柔らかくほぐしました。能「船弁慶(ふなべんけい)」は、平家と源氏の争いを背景にした武士の悲哀と、霊と人間の交錯する世界が描かれます。義経や弁慶、静御前が登場する人気の高い能で、荒れ狂う海を表す激しい囃子方の演奏のなか、長刀を振るいながら荒々しく舞う後シテ・知盛の姿は圧巻。普段のホール公演とは異なり、内と外、舞台と観客を隔てるものが溶け、ひとつの風景となり、多くの人にとって忘れがたい公演となりました。

また、関連企画として翌日に能楽ワークショップを開催。喜多流能楽師の狩野了一氏を講師に迎え、能面や装束に触れながら、能「船弁慶」をより深く理解するためのレクチャーと体験が行われました。15人の参加者が集まり、能の台本を使用した「謡」や「仕舞」の体験や小鼓のお稽古など、伝統芸能を身近に感じるひとときを過ごしました。

普段は公演の前や休憩時間に人々がくつろぐホワイエの空間が、この日のために設えられた能舞台に。窓の外の篝火によって、物語の世界へと引き込まれる

アフターワークショップには幅広い年齢層の参加者が集まった

利用団体公演レポート

熊本高校予餞会

2026年1月26日(月)　熊本県立劇場 コンサートホール

吹奏楽、オーケストラ、応援団が集まった閉会式は圧巻

受験を間近に控えた3年生への餞(はなむけ)として、1年生、2年生の在校生と教職員がパフォーマンスを披露する伝統行事「熊本高校予餞会」が、熊本県立劇場のコンサートホールで開かれました。

この熊本高校予餞会は、受験直前の1月末頃に開催されるのが習わしとなっており、形を変えながらも半世紀以上もの間ずっと受け継がれてきたものです。予餞会の実行委員会は、生徒会役員を中心に、有志として手を挙げた1年生、2年生の総勢27人。準備期間わずか3カ月で出演団体の調整から進行計画の作成、本番を想定したリハーサルなどを重ねて本番当日を迎えました。生徒会長であり、準備委員会のリーダーを務めた2年生の奥村拓斗さんは、1年生の時はバンド演奏で参加。「今年は実行委員会長として準備をしながら、演者としても参加したくてアコースティックギター同好会から出演しました」と語るように、企画する側も楽しむ文化が受け継がれていることがうかがえます。

パフォーマンスの内容は、伝統の江原太鼓、吹奏楽、オーケストラ、ダンス、コーラス、演劇、英語スキットなど多様。3年生を受け持つ教職員による「3年団」のドラマ仕立てのビデオメッセージでは、会場のあちこちから笑いと拍手が起きていました。式の終盤は司会進行に割って入るようにはじめる掛け合い、熊本高校名物の「げんこつ」で締めくくられ、生徒たちの記憶に残るひとときは幕を閉じました。

生徒会長の奥村さんは
ギターを持つと人が変わるとか

「本番当日のリハに機材トラブルが発生するなどハラハラした場面がありましたが、うまくいきました」と語る奥村さんは、来年は後輩や教職員から見送られる側になります

熊本県立図書館タイアップ企画『本の中にある劇場』

熊本県立図書館 情報支援課 主任主事
竹口 祥子[たけぐち さちこ]

光の美術モザイク

益田朋幸／著
岩波書店

この本は、古代末期から中世のヨーロッパで数多く作られた、均一な色の石やガラスのピースを組み合わせる「モザイク」の作品を図版も交えて紹介しています。いつまでも変わらないこの「永遠の絵」は、聖堂の窓からの光を受けて反射光で輝き、季節や天気、時間帯によって様々な姿を見せる「光の芸術」でもあるといいます。

博物館や美術館でモザイク作品の美しさを目の当たりにしたように感じていましたが、聖堂で「永遠の絵」が「移ろいゆく」姿はどんなだろうと想像するのも心躍ります。そして、タイパやコスパという言葉が定着し、具体的なメリットや結果を求めがちな世の中で、現地に足を運ぶからこそ味わえる「経験」というものの魅力に思いを馳せてしまいます。

舞台芸術もまた、その場でこそ味わえる魅力という点で通じるところもあるように思います。芸術に触れる「経験」への入り口として、読書も楽しんでいただければ幸いです。

県立図書館とのタイアップは2007年度から続いています。このコーナーでは、図書館職員おススメの一冊をご紹介します。

熊本県立図書館との連携「公演を楽しむブックリスト」

熊本県立劇場の主催公演の会場で、本の展示を見かけたことはありますか?年に4公演ほど、熊本県立図書館の全面協力のもと「公演を楽しむブックリスト」として図書を展示し、来場者全員にリストを配布しています。アンケートでも「ブックリストが嬉しい」、「おすすめの図書紹介は実にすばらしい取り組みだと思う」といった好評の声をいただいています。

連携が始まったのは2007年度。開始当初から県立図書館が選書した図書をブックリストという形で紹介してきました。2022年度からは会場ホワイエでの図書展示が始まり、公演前など自由に手に取っていただけるようになりました。タイアップ公演の開催月には県立図書館の閲覧室にも公演特集コーナーが設置され、図書館に来館する人を楽しませています。

選書の切り口は様々。「クラシック」「演劇」「ダンス」など演目のジャンルから選んだり、例えば「宇宙」「ショパン」など、その演目の内容に関わるキーワードから選んだり、ジャンル外の本を採り入れたり、様々な本が紹介されています。閲覧室に並ぶ本だけでなく、書庫に大切に保管されている本まで、県立図書館の約115万冊にものぼる資料の中から「より深く楽しむ時間になれば」という想いで公演にふさわしい本を選ぶ作業。なんだか膨大で途方に暮れそうになりますが、司書のみなさんにとっては「こんな本があったのか!」と新たな目線で資料をみるきっかけにもなっているそうです。

公演前に図書館で関連図書に触れて知識を増やすもよし、公演後に本を通して感じたことを反芻(はんすう)するもよし。自分が思ってもみなかった新しい出会いがきっと待っています。本と上演芸術、相性のいい2つの文化芸術がつなげる県立図書館と県劇のブックリスト。これからもご期待ください!

ホワイエでの図書展示の様子

県劇職員が本音を綴るリレーコラム

総務グループ
原口 浩［はらぐち ひろし］

舞台袖も緊張の連続

舞台の備品を整理していたら写真の機材が出てきました。オープンテープデッキ（以下オープン）オタリ製のＭＸ50という機種です。私は技術職員として入社し、最初は音響担当でした。入社した１９９０年頃、まだかけがある音楽の再生はオープンが主流でした。カセットはもちろん、ＣＤプレーヤーもあったのですが、音がワンテンポ遅れてしまいバレエなどのシビアなきっかけがある場合は使えません。舞台監督の手の合図が出た瞬間に再生できるオープンが使われていた訳です。

入社後、先輩達に教わりながらテープセットのやり方、操作、編集を何回も練習した覚えがあります。磁気テープを巻いたリールをセットし、テープを引っ張り出して、ローラーやピン、ヘッド、巻き取り用のリールに掛けていきます。間違えると全く動きません。

曲と曲をつなぐ編集作業も時間がかかりました。元のソースからダビングし、オープンで再生して曲頭で止める。手動でリールを回しながら、無音と曲の頭を探り、テープをカットします。曲終わりも同じようにカットし、白いリーダーテープをつなぎます。曲頭には曲名をマジックで書く。現代のように曲名表示の液晶パネルはついていません。

少し慣れたころ、地元のバレエ公演の音出し（たたき）を任されるようになりました。初めのころは、不安や緊張でドキドキでした。バレエの曲や用語に関しても知識が無かったので、勘違いで間違って音を出したりして。苦い思い出です。

再生機も時代と共に進化して、ＭＤ、ＤＪ用ＣＤ、メモリープレーヤー、ＰＣソフトで再生するなど便利になりましたが、舞台袖の緊張感は今も変わらず同じです。

舞台技術グループ
西坂 綾［にしざか あや］

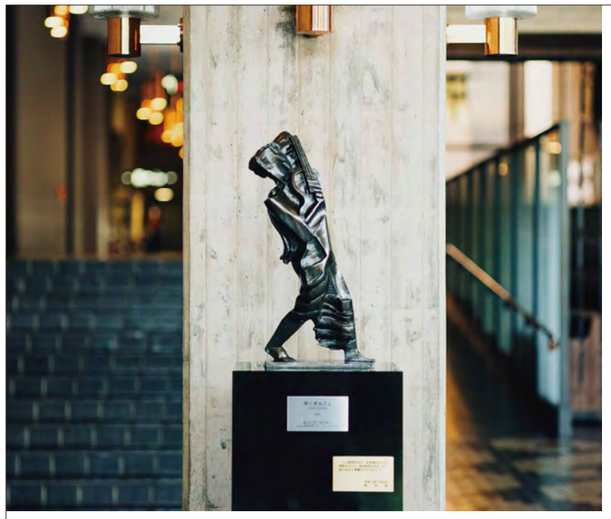
ずっと そばにいてほしい存在

パンデミック禍において、舞台芸術はある意味「不要不急」とされたことは、記憶にあたらしい。ある時、こんな文章を目にした。『役に立たないものがごくあたりまえに存在をゆるされる世界は、なんと豊かなのだろう。』（寺地はるな「架空の犬と嘘をつく猫」より抜粋）不本意にも私の頭の中で、「役に立たないもの＝舞台芸術」と置き換えられた。パンデミックによる劇場クローズ、ひいては舞台芸術が止まってしまった時間を、身をもって経験したからかもしれない。

多くの人にとって「食べること＝生きること」であるように、「舞台芸術を営むこと＝生きること」である人もいる。また誰かにとっては、より良く生きるための大切なエッセンスとして、舞台芸術が存在しているのだと思う。だからこそ、決して「役に立たないもの」ではないと信じている。それでもどうしたって舞台芸術は平和で安全な日常の中でこそ親しまれるものである、という側面も否定できない。

県劇開館40周年に掲げられたスローガン「日常に、劇場を。」このシンプルな言葉に、私は強く惹かれている。県劇の設計者である前川國男氏の言葉を借りれば「１００年持つ建築」であるこの劇場。これからも人々の心を豊かにする舞台芸術を生み出す場所として、ごくあたりまえに存在し続けてほしい。県劇１００周年まで、どんな日常が待っているか分からないが、その時間をそっと支え、守り育てていける劇場人のひとりになれたら…と思う。

県立劇場ギャラリー



1930年 ブロンズ 65×35×15㎝ (C)ADAGP, Paris & SPDA Tokyo,2010

歩くオルフェ
（オシップ・ザツキン 作）

熊本県立劇場の館内に多数展示されているアート作品をご紹介する「県立劇場ギャラリー」。
エントランスホールに並ぶ2つの彫刻は、ロシアに生まれフランスで活躍した近代彫刻の巨匠オシップ・ザツキンの作品です。ザツキンはギリシャ神話に登場する吟遊詩人オルフェウス（仏語ではオルフェ）をしばしば題材にしています。オルフェウスは竪琴（リラ）の名手ですが、この作品では、竪琴であるべき楽器が現代的なギターになっており、このモチーフはピカソら立体派の芸術家たちとの交流で会得したものです。
古今東西の様々な音楽が鳴り響く県劇コンサートホールの入り口で、オルフェウスは演奏家と観客たちを見守っています。

館長室から

春と青春

春は草木萌動からさらに生命が躍動する季節である。人生の若く活力に満ちた時期を「青春」と呼ぶのも生命の躍動に由来しているのだろう。入学や卒業、就職など、数々の「青春の門」が用意されているのも春だ。

ただ、青春には失意や蹉跌（さてつ）が伴うことがあり、ただ青春を、春を屈託なく謳歌（おうか）する気になれないのも私の正直な感慨だ。母が口癖のように、春は死と再生の季節だと独りごちていたことが思い出される。その母も春に逝き、さらに東日本大震災も熊本地震も春に多くの犠牲者を出した。萌え出づる春、そして躍動する春は、何と残酷なことか。しかしそれでも、大空の青さのごとく、小鳥のごとく、花のごとく

無関心でありながら、それでいて希望の光を注いでくれる春に心動かされるのはどうしてか。それは、青春と同じだからに違いない。希望にせよ、歓喜にせよ、あるいは失意にせよ、挫折にせよ、誰でもが一度はその洗礼を受けることになる青春を愛でるように、春を愛でたい。

姜尚中